誘惑調教ひとりじめ

義母の秘密メニュー

草飼晃
挿絵／旅人和弘

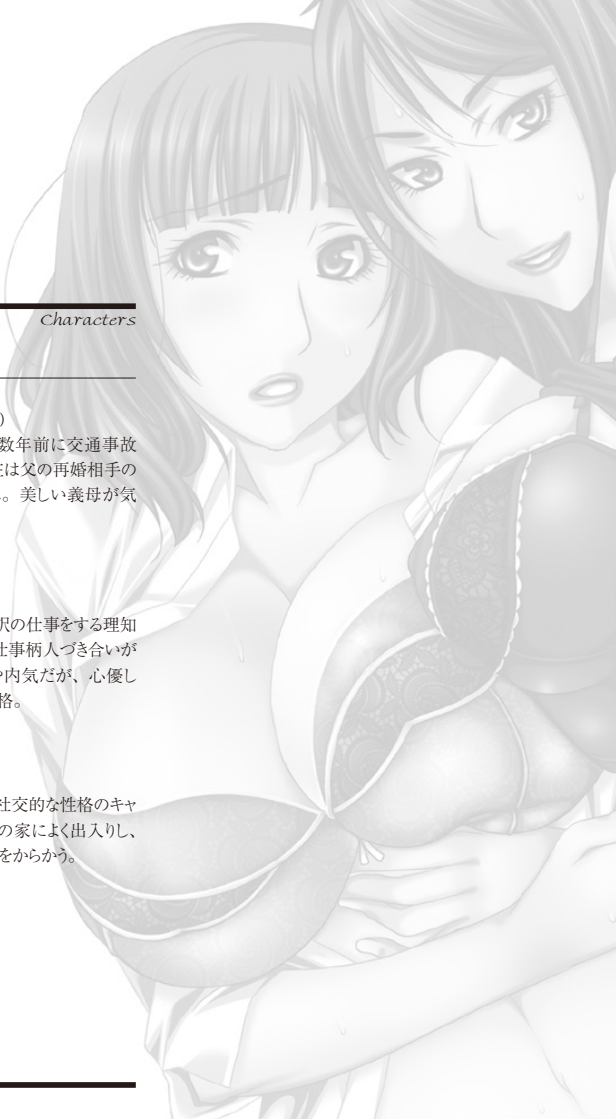
立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　秘めた想い……4
第二章　湯上がりの媚薬……55
第三章　和服でおしゃぶり……114
第四章　義母の秘密の縄……167
第五章　下着で監禁……212
第六章　首輪と手錠……242



登場人物 *Characters*

本上 修介
(ほんじょう しゅうすけ)

高校生の少年。数年前に交通事故で父を失い、現在は父の再婚相手の和香と二人暮らし。美しい義母が気になっている。

本上 和香
(ほんじょう わか)

修介の義母。翻訳の仕事をする理知的な三十二歳。仕事柄人づき合いが少ないため、やや内気だが、心優しいおっとりとした性格。

澄川 千夏
(すみかわ ちなつ)

和香の妹。明るく社交的な性格のキャリアウーマン。姉の家によく出入りし、しばしば甥の修介をからかう。

第一章　秘めた想い

義母は友達が少ない。
翻訳業という仕事のせいもあるのだろう。どうしても家にこもりがちだった。
そんな義母をテニスに誘ったのは、義母の妹の千夏さんだ。
「たまには身体動かさないと！　今度、修介くんも連れていって、三人でテニスしましょうよ」
「え、ええ……千夏ちゃんがどうしてもって言うんなら……」
「じゃあ言うわ！　どうしてもったらどうしてもよっ」
こういうわけで。
義母は三十二歳の肉体をウィンドブレーカーの上下――ウォーマージャケットとパンツに包むことになった。
（ああ……お義母さんのそんな格好、ぼく、初めて見たかも……）
その日は、本格的な春の到来を思わせる日差しがテニスコートに照りつけていた。
ちょっと身体を動かしただけで汗ばむくらいの、三月になったばかりだとは思えな

い陽気。吸いこむ空気には湿った土の匂いがたっぷりと混ざっていた。
春の芽吹きの匂いだ。
でも修介はそれどころではなかった。
（ああ。お義母さんを見てると、ぼく、ドキドキして、たまらなくなるよ……）
艶のあるブラウンに染められたやわらかそうな髪が肩口まで垂れかかっている。横に切り揃えられた前髪のせいでおかっぱ頭みたいにも見えるけれど、やさしい瞳や落ち着いた口元と相まって大人っぽさが醸し出されている。
もちろん、高校二年生の若者を魅了しているのは顔や髪だけではない。
（ああっ。おっぱいのかたちが、あんなに）
優にFカップかGカップはありそうなたっぷりとした乳房が、ウォーマージャケットに優美な曲面をつくり上げている。
義母がちょっと身動きするだけでふくらみは揺れ動き、まるで熟した女の色香をあたりに振り撒くかのよう。
ウエストがきれいにくびれているのも見て取れる。安定感と丸みを備えたお尻からむっちりとした太ももへとつづくカーブが、小柄ながら均整の取れたプロポーションを引き立てている。

更衣室から出てこちらに歩いてくる十五歳年上の義理の母親の姿に完全に見蕩れ、修介はその場に立ち尽くしていた。
「あらあっ？　何よう、修介くん？」
修介の横でクイクイと柔軟体操をしていた千夏さんが、すかさず声をかけてくる。
「さっきからボーッと、姉さんの身体ばっかり見ちゃって」
「ち、違うよっ」
違わないでしょう、と返して二十七歳の叔母はにやにやと笑った。きみの胸のうちはお見通しなんだからね、とでも言うかのように。
叔母はすらりとした肢体を本格的なテニスウァアに包んで、やる気満々だ。義母ほどではないものの充分に豊かな凹凸を備えたボディ。純白の生地を内側からぷるんと押し上げているお椀形の乳房や、スコートから伸びる剥き出しの生足は、高校生の少年にはやっぱり刺激が強い。
「そうよねえー。姉さん、あたしより背は低いのに、胸やお尻はまん丸いメロンみたいだもんねえー。あんなウィンドブレーカーなんかじゃなくって、あたしみたいにテニスファッションにすればいいのに。修介くんを一気に悩殺できちゃうわよん」
「いやだわ、千夏ちゃん……修介さんだって困ってるじゃないの。悩殺だとか、あん

まり変なこと言わないの」
修介たちのところまでやってきた和香はほんのりと顔を赤らめた。そもそもわたしたちは親子なんですからね、とつけ足す。
義母の言う通りではあった。
血の繋がりこそないものの、和香と修介は一つ屋根の下に暮らす、れっきとした親子の関係だ。
「そうだよ、千夏さん。ぼく、別にお義母さんの方とか、見てたわけじゃないし」
いいえーと言って叔母は首を左右にぶんぶんと振る。
「修介くんのそのあわて方がそもそもあやしいったらないわ。んふっ。ちょっとからかってみただけなのに。まさか、きみ、ほんとに姉さんに気があるのかしら？」
「ないったら！　やめてよ、千夏さん！」
修介はなんとかごまかそうとしてみた。
けれど叔母は追及をやめようとはしない。
「あたしはちゃーんと見てたわ。さっきのあれは牡が獲物を見る目だったわよ」
「そ、そんなこと、ないって！」
「ほんとかなあ？　ねえねえ、あのさ修介くん」

テニスウェア姿の叔母は甥の肩に手をかけて顔を近づけ、瞳を覗きこんできた。
修介はびっくりして、思わず唾を飲みこんでしまう。
（わ……千夏さん）
姉妹だけあって顔の輪郭がシャープなところなど二人ともよく似ている。加えて、千夏さんの切れ長の目やしっとりと濡れたようなくちびるは姉以上に蠱惑的だった。艶やかなストレートの黒髪は背中の中ほどまでかかっている。
「姉さんやあたしより、クラスに気になる女子とかはいないのかな？　今どきの女子高生ならいい身体してるでしょう？」
「え……そ、そんな」
「千夏ちゃん。そういう言い方って、わたし、ちょっといやだわ」
むちむちに漲ったボディでウィンドブレーカーに優美な起伏をつくり上げている義母が、後ろから千夏さんのテニスシャツの袖を引っ張る。
「それに、あんまり修介さんをからかったらかわいそうよ。確かにわたしにも紹介してくれたことはないけど、修介さんだってきっとガールフレンドくらいいるわ。ねえ、修介さん？」
今度は義母から尋ねられて、修介はまた戸惑う。

「え……う、うん、ま、まあね」
つい反射的にうなずいてしまっていた。
でもこころの中では、
（ガ、ガールフレンドなんて……いないよ！）
と断言していた。
（お義母さん以上にすてきな人なんて、どこにもいないよ。ぼくは、ぼくは、お義母さんのことが、いちばん……！）
秘めた想いで胸の中がいっぱいになって口もきけなくなってしまう。
そんな修介の肩から手を離すと、叔母はパンパンと手のひらを打ち合わせた。
「さあさあ。修介くんをいじって遊ぶのはこれくらいでかんべんしてあげる。あはっ。じゃあ始めましょうかっ」
「始めるのはいいけれど、一人余るわよね。修介さんと千夏ちゃんが最初にすればいいわ。わたしは見ていますから」
スポーツの苦手な義母がそう提案したが、千夏さんはだめだめと言ってひとさし指をワイパーのように動かした。
「姉さんだけじゃなくて、修介くんもろくにテニスしたことないのよね？　だったら、

いいわよ。二人まとめてかかってらっしゃい」
「千夏ちゃん、本当にそれでいいの……？」
「いいのいいのっ。ただし、負けた方が全部脱ぐのよ」
「ち、千夏さん、何を言ってるの？」
「あははっ。冗談よ、修介くん。決まってるじゃない」
一人対二人の変則マッチが始まった。
確かに実力差は歴然としていた。和香や修介はラケットに当てて相手のコートに返すのがやっとだが、千夏さんは颯爽とコート上を駆けてそのボールに追いつき、華麗なフォームで打ち返してくる。
（わ……千夏さん、うまい！）
それでもそれなりに何回かラリーがつづいた後だった。千夏さんのボレーした球が義母と修介のちょうど中間地点に落ちた。ぼくが打ち返さなきゃ、と必死で駆け寄った修介だが、ボールに追いつくことに夢中で、義母が同じように走ってきたことに気づくのは遅れた。
「あ、わ、わ……お、お義母さん、ちょ、危ない、ど、どいて」
「きゃ」

先に転んだのは修介だった。
その目の前で義母も足をもつれさせる。ぼくがクッションになってあげないとお義母さんが怪我をしてしまうかもしれない――その瞬間には純粋にそんな気持ちしかなかった。コートの上でとっさに仰向けになった。
ところが義母の体重をその身で受け止めたとたん。
「あはぁん……っ」
(ああ！　お義母さん！)
全身が電気に貫かれたようにバチンと痺れた！
和香の肉体は弾力に満ちていた。想像以上に。
修介は反射的に義母の背中へ腕を回していた。ぬくぬくとした甘い体臭に反応して修介の腕に力がこもった。ああんとうめく義母の湿った吐息が修介の首すじをくすぐる。豊かな乳房は修介のお腹のあたりに押しつけられていた。
(や、やわらかい。お、大きなマシュマロが当たってるみたいだ)
和香のおっぱいの予想以上の感触のよさは、修介の中に強い罪悪感を呼び起こした。
(だめだよな……お、お義母さんなんだから)
でも。

（ああ、こうしてると気持ちいい。ずっとこうしていたい）
肉体と肉体が触れ合っているのはお互いの上半身だけではなかった。下半身もだ。義母のお腹や太ももを修介ははっきりと自分の身体で感じ取っていた。修介の下腹部のある一点へ自然にどくどくと血が巡ってくる。
「あ、あの、修介さん……大丈夫？　わ、わたしの下敷きになってしまって……」
小柄なのにボリューム豊かな肢体の持ち主は、ちょっとつらそうに眉間に皺を寄せていた。
どこも打ってはいないはず。だから。修介が強く抱きしめているが故の表情かもしれなかった。
「ご、ごめん、お義母さん……」
腕をぱっと広げて義母を解放する。
「い、いいえ……悪いのはわたしの方だから……」
顔を真っ赤にさせて身体を離した義母は、さあ修介さんと言って手を伸ばし、十七歳の息子が起き上がるのを手助けしてくれる。
「ちょっとお、二人とも、何いつまでもいちゃついてんのお？」
ネット際まで駆け寄ってきた千夏さんが、じりじりしたような口調で文句を言った。

「そ、そんなんじゃないったら！」
「そうですよ。修介さんも、わたしも、ちょっと転んだだけなんだから。からかうものじゃありません、千夏ちゃん」
薔薇のつぼみみたいなくちびるを動かして妹をたしなめる義母。
叔母は、はいはい、と言って肩を竦めた。

※

「なーにか二人におごってもらわなくっちゃなあー」
「でも千夏さん。もし自分が負けても、ぼくらに何かおごってくれるつもりなんてなかったよね……？」
あれから三十分ほどつづけたけれど、結局一人対二人でもポイントを重ねるのは千夏さんの方ばかりだった。
修介は義母と身体を密着させてしまったことで頭の中がいっぱいでもうテニスどころではなくなっていたし、義母の動きもぎこちなくなっていた。そんな二人組がスポーツの得意な澄川（すみかわ）千夏に勝てるわけがなかったのだ。
「そんなことないわよお、修介くん。もしあたしが負けたら、脱いであげるつもりだったんだからっ」

「ち、千夏さん、変なことを言うのはやめてよ……っ」
「いいわ、千夏ちゃん。あなたには今度何かごちそうしてあげるわ」
「ていうかあたし、しょっちゅう姉さんのところで晩ご飯ごちそうになってるけどね。えへへっ」
スポーツセンターを後にした三人は駅に向かって歩いている。
義母はこれから打ち合わせで出版社の人と会うらしい。スポーツセンターの更衣室でよそ行きに着替えている。オーダーメイドのスーツを着た義母は、まるで一流商社の有能な女性秘書みたいだ。
一方叔母はテニスウェアの上にスプリングコートを羽織っただけ。自宅のマンションから姉の家までその格好で車に乗ってやってきて、そこからスポーツセンターまでは徒歩で三人いっしょに来たからだ。
「どう、姉さん。たまには外で身体動かすと、気持ちいいでしょう？」
「ええ、そうね。すっきりしたわ。ありがとう、千夏ちゃん」
笑顔を妹に向ける義母。
その横を歩きながら修介はこっそり思う。
（ぼ、ぼくは、すっきりどころか、むしろ……もやもやが増した感じ……お義母さん

とあんなに身体を密着させちゃうなんて……ああ、どうしよう。オナニーしたくなっちゃったよ。まだ昼間なのに！）

いかんいかんと首を横に振り、よこしまな思いは振り払おうと努める。

それを目に留めたらしい叔母が話しかけてきた。

「あらっ。どうかしたの、修介くん。首がおかしいの？」

「え、なんでもないよ、千夏さん。そ、それより、今日はいい小春日和だよね！」

何気なく口にした修介のことばに叔母と義母は揃って、えっ、という顔になった。

それだけでなく急に立ち止まってしまった。

「あれ、どうしたの二人とも……？　お義母さん？　千夏さん？」

「ねえっ、修介くん。今なんて言った？」

叔母がにっこりと笑って問いかけてくる。猫撫で声だ。罠が仕かけられているみたいでなんだか不気味だった。

「ぼ、ぼく、おかしいこと言った、かな……？」

「修介くん、ちょっと問題出していい？」

不審がる甥を無視して千夏さんはそんなことを言い出した。

「ええっと、そうねえ。じゃあ『彼は元旦の昼頃起き出して、きのうの残りのたぬき

そばを食べた』――この文章でおかしいところを述べよ」
「……さみしいお正月だよね」
「そこじゃなあい！」
叔母はげんこつをつくると、漫才師の突っこみのように修介のこめかみをごつんと押した。
「やめてよ千夏さん。ううん、じゃあ……たぬきそばが引っかかるんだよなあ……きつねっていう時とたぬきの時との違いは？」
「そこでもなあい！」
また、ごつん。
見かねたのか義母が教えてくれる。
「あのね、修介さん。元旦っていうのは普通は、元日の朝のことなのよ」
「あ、ああ、そうなんだ……」
初めて知ったよと修介はこころの中でつぶやく。
いやしかし。去年の暮れにテレビのヒーローインタビューで『元旦からサッカーができるというのは幸せです』とか言ってたぞ？　やっぱり元旦には元日って意味だってあるんだろ？

そう言おうとしたが、その前に叔母が次の問題を出してきた。
「それでは第二問。えっと、そうねえ……間違いがあったら指摘せよ。『東京スカパラダイスオーケストラ・フューチャリング・和田アキ子』」
おお。それはなんだか、すごそうだ。
でも間違いがあるかと訊かれたら……。
「……別に普通だよね。言うよね。フューチャリング何々とか」
すると叔母はあちゃあとつぶやき、
「あのね、ｆｕｔｕｒｅには特集を組むとか誰それを特別目立たせるとかいう意味はないんだな。それはｆｅａｔｕｒｅ」
と説明してくれた。
体育会系出身でスポーツの得意なちゃきちゃきしたキャリアウーマン、というイメージが強い叔母だったが、なかなかどうして、実は学問の方も優秀らしい。
「そうなんだ……ぼく、知らなかった」
「でも、そういう間違いは誰だってあるわよ。わたしだってお仕事始めてから知ったことだってたくさんあるし。今だって気づかずに、おかしな表現を色々していると思うし。だから修介さんが間違っていても、そんなに一方的に責められないと思うわ」

うなだれる修介の横で義母がそう言ってくれる。
翻訳家として英語と日本語を日々操っている義母は、叔母以上にことばには強い。
大学在学中からアルバイトとして下訳を任され、卒業してからは会社に就職はしないでフリーで翻訳業をつづけた。専門は英米文学。
二十五歳の時に本上俊吾（ほんじょうしゅんご）と見合い結婚。和香は初婚だが俊吾は当時十歳の修介を連れての再婚だった。和香はいったん仕事は控えるようになったが、二年後、俊吾が交通事故で亡くなった。
それをきっかけに義母は翻訳業を再開し、今は俊吾の遺した一軒家に修介と二人で暮らしている。
「あのう、じゃあ、さっきの、小春日和っていうのは……」
修介の疑問に、義母はやさしく解説をしてくれる。
「あのね、修介さん。十一月頃になってからの暖かい日和のことなのよ。主に冬に使うの。今みたいな春先の日には、小春日和とはいわないの」
「……ねえ、姉さん。修介くんって、四月から高校三年よね。受験生よね？」
叔母は珍しく真剣な口調だった。
「受験生で小春日和がわかってなかったのは、さすがにちょっとまずいんじゃない？

大丈夫なの？」
うーんと言って未亡人翻訳家は小首をかしげる。
「この前、実力テストの結果を見せてもらったんだけど、理数系は修介さん、とてもよくできるのよ。世界史も悪くないの。現代国語と英語は少しふるわなかったわね」
いや、ふるわなかったというより壊滅状態に等しい。
義母の婉曲表現にもかかわらず修介の実力のなさは正しくつたわったらしく、叔母は、もっとしっかり勉強した方がいいわよね、と言い出した。
「いっくら理数系が得意でも、基礎学力は万遍なくつけておかなきゃ。学校の勉強だけじゃ足りないんじゃない？　学校以外でも、もう少しがんばってみたら？」
「千夏ちゃんの言う通りかもね。どう、塾に通う、修介さん？」
「う、うん、そうだね……」
クラスメートにも予備校に通っている者は何人かいるようだった。苦手を克服するためにはそれくらいしないとだめかなと思い、修介はしぶしぶうなずいた。
ところが叔母は、
「そんなの必要ないじゃない。塾や予備校なんて時間とお金の無駄無駄」
そう言うのだった。

叔母は修介を見つめ、にっこりと笑ってこうつづけた。
「だって、あたしと、和香姉さんがいるんだから」

※

「んふーん、やっぱりスポーツの後の一杯は格別よねっ」
冷蔵庫から出してきた缶ビールをごくごくと飲み干すと、黒髪がよく似合う長身の美女は、ちゅはーっと息を吐く。
窓から明るい光が入りこんでくる広々としたリビング。薄型テレビが収まっている壁面のラックには修介の亡くなった父親——俊吾の写真が飾ってある。
打ち合わせ場所に向かう義母を改札口で見送ってから、自宅に戻ってきたところだ。
自宅まで歩く路上では、すれ違う人がテニスウェアの上にコートを羽織っただけの叔母の胸や太ももに視線を向けてきた。が、本人は平然としていた。
(見られることに慣れてるんだろうな……千夏さんも美人だもんな……)
ただ、小柄な義母と違って千夏さんは背が高い。
百七十センチの修介とだいたい同じくらいある。そこは修介の女性の好みからはちょっと外れていた。多感な男子高校生としてはそれでもやっぱり、叔母も気になる存在ではあったけれど。

「じゃあ修介くん。さっそく来週から、きみの勉強のコーチをしてあげるね」
ビールの缶をクシャッとつぶしながら、テニスウェア姿の叔母は言った。
「でも、千夏さん。本当にいいの？　仕事だって忙しいんでしょう？　それなのに、ぼくの勉強まで見てくれるだなんて」
ちなみに名前で呼ぶのは千夏さん本人の希望だ。
以前、お義母さんの実の妹なんだから血の繋がりはなくても一応叔母だよなと思い、叔母さんと呼んだら、『ちょっと、それ、やめてくれる？』と言われた。オバさんという意味に取ったのかもしれない。
「晩ご飯食べさせてくれるっていう条件つきだからね。全然オーケーよん。とりあえず、目標は高三になってからの最初の実力テストでの得点アップねっ」
マンションで一人暮らしをしている千夏さんは以前から姉の家に入り浸りで、平日でも仕事帰りに夕飯を食べていくことも多かった。そのついでに甥っ子の勉強を見るくらいはなんでもないらしかった。
叔母はきれいな黒髪を掻き上げながら不意に話題を変える。
「それより、ねえねえ、修介くん」
「何、千夏さん」

「さっき、姉さんを抱いた時、どうだった？」
「え……ええっ？」
いきなりそんなことを言われて、口をぱくぱくさせるぐらいしかできなくなる。
（だっ、抱いてなんていない……ように見えてたと思ったけど……や、やっぱりそうとしか見えてなかったのかな……）
「こらこら。口パクでごまかすんじゃないの。声優さん、仕事してー。Ｆカップのおっぱいをムニュムニュした時はどんな感じだったのかな？　さあ言いたまえ」
「ど、どんなって。別にどんなでもないよ。ぼくはただ、お義母さんが怪我しないようにって思ってただけでさ」
「嘘よね。んふっ」
叔母は修介の腕を掴んで、ぐっと自分の方に引き寄せた。
「ここ、硬くしてたくせに」
同時に、女らしいやわらかい手がそっと男子高校生のジーンズの股間の上を撫でた。
「ふくらんでるの、わかっちゃったんだから」
「そ、そんな……千夏さん、やめてよ」
と言いつつも、叔母の手のひらの感触がなんだかとっても気持ちよくて動けなくな

ってしまう。
ところが叔母の手は、敏感な肉棒の上からサッと離れてしまった。
「んふふ。ね、修介くん。どこ見てるの？　あたしのバスト？」
「ち……違う……そうじゃなくて」
そうじゃなくはなかった。間近に迫っている年上の瞳を直視するのが恥ずかしくてうつむいた修介の視線の先には、テニスシャツを持ち上げるおっぱい。義母ほどではないが叔母の胸のふくらみも魅力的だ。童貞少年には刺激が強すぎるくらいだった。
（うう……なんで女の人って、胸にこんなにきれいな曲線（カーブ）を持ってるんだろう）
砂鉄が磁石に吸い寄せられるように、修介の視線は釘づけになっていた。見るからにやわらかそうなその胸に。勃起中枢をビンビンと刺激してくるその魅惑的な曲面に。
「ねえ、修介くん。きみ、四月からは高三だもんね。顔つきだけじゃなくて身体つきも俊吾さんにそっくりになってきたし。そろそろいいよね。男になってもいい頃」
「え、え、えっ？　なんの話、千夏さん？」
「んふっ。あたしはね、きみには見どころがあるんじゃないかなって、前から思ってたんだよね」
「みみ、見どころ？」

乳肉のむっちりしたふくらみからなんとか目を逸らし、顔を上げて叔母を見る。
二十七歳のキャリアウーマンは、そうよ見どころよと言って、なぜか自分のくちびるを舌で湿らせた。
「姉さんをしあわせにできるのは、きみしかいないんじゃないか、ってね」
「しあわせって……お義母さんはしあわせじゃないの？」
息を吹きかけるように耳元へ語りかけてくる叔母。
「女のしあわせってことよ」
「え……？」
意味がわからない。女のしあわせってなんだろう？
叔母はいきなり、テニスシャツに包まれた胸のふくらみを男子高校生の胸板に擦りつけてきた。
（わわ……千夏さんの、おっぱいが！）
むにゅりとした温かいものが胸板に当たってかたちを変える。お互いが衣服越しなのにもかかわらず、修介の身体は叔母の乳果実が当たっているところからカッカと火照ってきた。テニスウェア姿のアクティブな叔母はにっこりと笑う。
「わからない？　んふっ。だからね。あたしはそろそろ修介くんに、男性としての自

覚を持ってもらいたいかなって、思ってるんだな」
「じ、じ、自覚って？」
「あら、難しいこと言ってるわけじゃないよ。今日はもう現国や英語のクイズは出さないから安心してねん」
ささやくような声で叔母はつづける。
「ただね、もうちょっと、こっちの欲望に素直になった方がいいんじゃないかな？」
均整の取れた肢体の持ち主は、また高校生の股間に手のひらを這わせてきた。
やわらかくて細い指にすりすりとまさぐられる。
「んふふ。ジーンズの上からじゃ、もの足りないよね？」
「ななな、何を」
「動いちゃダメ」
年上のキャリアウーマンは素早く甥のベルトを緩め、ジーンズのチャックを半分ほど下ろし、手を差しこんできた。トランクスの中にまで指先が入りこんできた！
「ち、千夏さん、だめだよこんなこと。いったい、急に、なんで、どうして？」
修介はなぜか動けなかった。金縛りに遭ったみたいにその場に立ち尽くし、叔母にされるがままの状態だ。

けれど千夏さんは陰毛の近くをまさぐりつづけるだけで、なかなかその先へ指を進ませてこない。逡巡しているのではない。うれしそうなその表情から、ジワジワと弄ぶこと自体を愉しんでいるらしいのがわかる。

「千夏さん……や、や」

理性ではやめてくださいと言おうとしているが下半身の方は、もどかしいから早くおちんちんにさわって！　と願っていた。身体はいっそう汗ばみを増していく――。

叔母は面白くてたまらない、という風な笑みを浮かべていた。

「ふふっ。さわって欲しいんでしょう。あたしの指で撫でて欲しいんでしょう」

「う、う、うん……っ」

正直になるしかなさそうだった。嘘をついても叔母には見破られるような気がした。

ところが千夏さんは、舌先でくちびるを湿らせながら畳みかけて訊いてくる。

「どこを？　ほら、言いなさい」

濡れ光るくちびるにささやかれて、修介は胸をドキドキさせながら答えた。

「あ、あそこ」

叔母はそれでは許してくれない。自分の黒髪をいじりつつ首をかしげる。

「それじゃ、あたし、わかんないなあ」

「だから、せ、せ。せせ性器を……」
「もっと別の言い方があるでしょ？　わかるでしょ？」
（そ、それを、言ったら！　さわってくれるんだよね？　撫でてくれるんだよね？）
「お……ちんちん、です」
「んふふ。よく言えたねっ」
やわらかい指先にそっと陰毛を撫でられた。硬直した身体にピリッと痺れが走る。
指はゆっくりとペニスに近づいてきた。
「むずむずして、たまんないんでしょう？」
「う、う、うん。なんでわかるの？」
幹の根元をやわやわとまさぐられただけで、肉棒はいっそうカチンカチンになった。
「出したいんでしょう？　あたしの指に擦らせて、スッキリしたいんでしょう？　そうでしょう、修介くん？」
「なんでわかるの？　そ、そう。そうです」
「修介くん、姉さんといっしょに暮らしていたら、きみも大変でしょ。この欲望、もっとうまくコントロールできるようになった方がいいわよね。そう思わない？」
「こ、コントロール？　う、うん、そうだね……」

叔母が何を言おうとしているのかは今いちわからなかったけれど、修介はなんとなくうなずいてしまった。
「でしょう？　だから、あたしが一つ……練習台になってあげようね」
今まで千夏さんの口から聞いたことがないようなやさしい声だった。
「ほら、ここも。好きなようにしていいんだよ。好きなようにできるんだよ」
お椀形にふくらんだ自分のバストをまた擦りつけてくる。
「や、や、やわらか……で、でも。好きなようにって言われても」
二十七歳オトナ女子の指はとうとう肉棒の幹を這い上がってきた。初めてそこに触れられる刺激でますます興奮は高まってくる。同時に強い羞恥心もこみ上がってくる。
「こ、困る。だって、ぼく」
「童貞だから？　んふっ、そんなにおどおどしなくていいの。やっぱりさ、何事も一回経験しちゃった方が、色々楽になると思うんだわ。姉さんも、どっちかというと人づき合いが苦手で、自分から何か仕かけるタイプじゃないでしょう？」
白い布地の上に匂い立つようなボディラインを浮き上がらせた叔母が言う。
「きみも似たようなものかもしれないけど、やっぱり男なんだからね。時には男の方から強く出てあげないと。女の方はずっと待ってるものなんだよ」

「な、な、何を言ってるのかわかんないよ、千夏さん」
だーからあ、難しいことを言ってるわけじゃあないんだよ——と年上女性は耳元で悩ましくささやく。何かの果実のような匂いがふっくらと鼻先にまといついてきた。
「ほら。きみも、もっとあたしの好きなところにさわっていいし、あたしを自由にしていいって、さっきからそう言ってるのよ」
「そ、そんな」
肉棒をつまむ叔母のたおやかな指に、少し力が加わった。くに、くに……。
「そんなにあたし、魅力ないかなあ?」
「そういうことしながら訊かないで……その、その、魅力的だと思います……」
本音だった。小柄で大人っぽい落ち着きをたたえた義母と対照的とはいえ、千夏さんは千夏さんでフェミニンな魅力でいっぱいだ。頬は色艶もよく、瞳は強い生命力をたたえてきらきらと輝き、胸果実とお尻はその長身に優美な起伏をつけ加えている。
「あたしが練習台じゃ、不満?」
「え。あ。その……」
口の中いっぱいに溜まった唾液をごくんと飲みこんでから、修介は答える。
「そ、そんなことは、ないです。ていうか、だから練習台って何?」

練習台の意味が本気でわからない。
「んふふ。ね、じゃあはっきり訊くけどさ。あたしのこと、欲しくない？」
スリムな肢体の持ち主はいきなり修介を抱き寄せ、くちびるにくちびるを当てた。
（うわ、や、やわらかくて濡れたものが、ぼくの口に……！）
びっくりして修介は目を閉じてしまった。
くちゅ、と叔母のくちびるが押しつけられている。衣服越しに触れた叔母の胸の感触ともまた違うやわらかさだった。くちびるの表皮と表皮の密着したところから顔へ、ヒリヒリするような心地よい痺れが広がってくる。
その痺れがだんだん喉から胃の方にまで下がり、下腹部の熱いうねりに直結し、ペニスはいっそう硬さを増してきた。
息が苦しくなって離れようとしたが、叔母の手は男子高校生の頭をしっかりと押さえこんでいた。キスをつづけながら叔母の指腹がそっと首すじへ触れてくる。首からも、くちびるで感じているのと同じようなピリピリした快感の波紋が身体に広がる。
と――十七歳のくちびるを割って今度はやわらかな肉が口の中に侵入してきた。
生温かくて濡れた肉にくねくねと口腔内をまさぐられる。千夏さんの舌だった。修介の舌先を探り当て、ねっとりとからみついてくる。

「ふちゅ、修介くんも、遠慮しないで、弄んで、いいよ……むちゅ、んちゅ」
（うう……千夏さんの舌に、ぼくの舌が食べられてるみたいな……！）
口の中で肉と肉のからまる感覚。それまで以上の戦慄が腰に向かって走った。修介はしゃっくりするみたいにビクンと身体を弾ませた。まぶたを上げると、意外にも叔母は目を閉じていた。うっとりしたような表情で修介の舌をまさぐりつづけている。
「修介くんの口、おいしいね。あたしも、おかしな気分になってくるよ……くちゅ」
（も、もう、ぼく、息ができなく……）
叔母は甥の口中にふうっと息を吐き出してくる。修介にはそれは真似できなかった。千夏さんはそのまましばらく修介の口の中をむさぼるように舌を動かしつづけたが、修介が胸や肩を苦しそうに震わせると口をゆっくり離してくれた。
「ふはーっ、ふはーっ」
伸びた唾液の糸が、自由になったばかりのくちびるにぺちゃりと張りついた。
「ね、修介くん。あたしのパンティー、下ろしてもいいんだよ」
千夏さんはいつの間にか修介の肉棒からも手を離していた。今度はいきなり手首を掴み、自分のスコートの中へと導く。
「そ、そんな、千夏さん」

「女子のパンティ、脱がしてみたかったんじゃないの？」
「そんなこと、ぼくは」
「ないなんて言ったら、嘘つきになっちゃうよん」
キスの強い余韻で頭の中に靄がかかっている修介には、叔母の手を振り払うゆとりはなかった。
指先が布地に触れた。テニスウェアとは違う。絹か何かのようになめらかな感触。
「さあ、指でつまんで、下ろしてちょうだい。剥いてちょうだい」
「で、でも、でも、やっぱりだめなんじゃ……」
戸惑いつつも修介は叔母の下着の縁に指をかけた。
指先がはっきりと年上女性の体温を感じた。肉棒と同じくらいに身体の芯が硬直してしまって、もうこれ以上動かせそうにない。
「ち、千夏さん、ぼく……やっぱり無理」
「無理じゃないわよ。じゃ、手伝ってあげる」
叔母の手が修介の手首から手の甲に移った。上から包みこむように握られる。導かれるままに叔母のショーツを剥き下ろしていく。
その興奮だけで股間の若竹はいっそうトランクスを持ち上げてしまった。先端は内

側から擦れて痛いくらいだ。
躊躇して手を止めると、甲に重ねられた叔母の手が、さあ、とでも言うように力を加えてくる。
膝のあたりまでショーツを下ろしてしまうと千夏さんは、よくできたわね、という風に微笑み、後は自分でふくらはぎの上を滑らせ、爪先からぬるりと抜いてしまった。
謎の積極的行動をつづける叔母は、その布きれをリビングのソファの上に置く。
（ああ……千夏さんのパンティー）
「うふふ。そんなにあたしの下着が気になる？」
視線に気づいたらしい叔母がまた笑う。
「いや。その。あの」
「もっと気になるところがあるはずなんだけどなあ」
狼狽している甥っ子に視線を注ぎながら、叔母はやさしい口調で促す。
「ねえ、修介くん。トランクスの中の修介くんのおちんちん、どうしたい？　あたし、もうこのスコートの下は何もつけてないんだよ」
「え、ええと。ええと。でも。あの」
「あたしが欲しい？　叔母さんのこと欲しくない？　欲しいでしょう？」

珍しく千夏さんは自分で自分のことを叔母さんと呼んだ。
（ど、どうしよう……ぼく、まさか、こんなことなるなんて！）
甥っ子が膝をがくがくさせていることに気づいたらしく千夏さんは、しょうがないなあ、あたしが脱がせてあげるね、と言い、また手を伸ばしてきた。
二十七歳の指がチャックを完全に下ろし、ジーンズを脱がしにかかる。
「千夏さん、ぼくたち、し、親戚というか、家族っていうか、いっしょに住んで……るわけじゃないけど、家族みたいなものなんだから、だめだと思う」
口ではそう言いつつも、修介はもう十歳年上の叔母のリードに己を委ねてしまっていた。がさつな印象が強かった千夏さんとは思えないほど、そのふるまいはやさしい。目の前にあるその肢体は、義母とはまた違った魅力をたたえて若い牡を誘っている。
「ね、修介くん。怖がることなんてないんだよ」
ツヤツヤ光る黒髪の持ち主はやさしくささやくと、甥をリビングの床に寝かせた。下ろされたジーンズが足首にからまり、修介は思い通りには動けそうにない。
二十七歳のキャリアウーマンはそのまま覆いかぶさってきた。修介の腰骨のあたりをやわやわとまさぐりながらトランクスを剥きにかかる。
「千夏さん、なんでこんなこと……いけないよ、や、やめようよ」

叔母のしなやかな指先が肌に当たるたびにざわざわした痺れが走って、下腹部はいっそう熱くなる。やめようよということばとは裏腹に、さらなる快楽の予感で男子高校生の心臓は高鳴っていく一方だった。

（千夏さんの指先、たまらない……女の人の指でトランクスを下ろされるのがこんなにいいなんて……）

ひょっとしたら千夏さんも自分で下着を下ろすよりもぼくの手で下ろされる方が気持ちがよくて、それでぼくの手を導いたのかもしれない。修介はそう思った。

勃起のせいで途中で引っかかったのを強引に引っ張られ、トランクスも膝まで脱がされた。一回お辞儀をした肉棒はイキのいいしなりを見せて、ふたたび天を向く。

「ふふっ。元気なおちんちんね」

胸の悩ましい二つのふくらみを見せつけるようにしながら、叔母はにんまり笑う。

（ああ……千夏さんに、見られてるんだ……）

二十七歳の匂いを嗅いでいるだけでも、若竹はいっそうこわばりを増してしまう。

（ちんちんには、さっきちょっとさわられただけなのに……こんなに感じちゃってるなんて。やばいよ……これでまた直接さわられたら）

どうなってしまうだろう。

しかし叔母は今度はなかなかさわってくれない。まるで焦らすかのように陰毛をさらさらと撫でながら十七歳男子の首すじに顔を寄せ、息を吹きかけてくる。
（ぼ、ぼくからも、何かした方がいいのかな……？　そういうことかな？）
でも叔母の手で陰毛やら腰骨の上やらをやわやわとまさぐられるだけでぴりぴりと気持ちがよくて、何か行動を起こそうなんていう気にはならない。
それでもゆっくりと腕を上げ、テニスウェアに包まれた肢体に触れようとしてみる。
すると、
「んふふ。いいんだよ。きみは何もしなくて。あたしに任せて」
手首を握られ、元の位置に戻された。
そしてオトナ女子はまたやわやわとした愛撫をつづけてくる。
「あの、千夏さん、あの、あの、ぼく、もう、が、我慢できないっていうか！」
「あらっ、そうなの？　んふふっ」
どぎまぎしながらの修介の告白に、叔母はいっそう瞳を爛々と輝かせる。
「じゃあ、言ってごらんなさい。どうしたいの？　きみはもう下半身剥き出し。あたしもスコートの下には何も穿いてない。それでは次の問題。さあ何をしたい？」
（今日はもうクイズは出さないって言ったくせに！）

「えと、だ、だから、その、できれば、エ、エッチなことを……」
「それって、どこがいい？　ひょっとしてきみ、童貞喪失は女性のアヌスで体験したいって思ってるとか？」
「アヌスって何？」
「本当に英語が苦手なんだね。肛門よ。形容詞が　ａｎａｌ　名詞が　ａｎｕｓ　最上級が　ａｎａｓｔａｓｉａ――あたしのアナスタシアで初体験したい？」
「そ、そんな」
修介はあわてて首を横に振った。
「じゃ、何が欲しいのかな？　はっきりことばにしてごらん。あたしのどこですっきりしたいの？　言ってくれないとわかんないよ」
（な、なんて意地悪なんだ……っ）
修介はそう思いつつも文句など言えない。震える声で、途切れ途切れに口にする。
「ち……千夏さんの……だ、だから、お、お」
「おま○こ、でしょ」
こくんとうなずいた。叔母がそんなことばを口にしたことが信じられない。自分からは、とても言えそうになかった。

「うふふ。まあいいわ。ほんとは言わせたかったけど、修介くんなら許してあげる」
蠱惑的なふくらみをたたえた肢体の持ち主はまさぐりをやめ、左右の腰骨の上に手のひらを置いたままで、修介の下半身にまたがってきた。
やっと肉棒に指が添えられた。つるりと包皮がめくり返される。刺激はかなり強く、先走りがとろりと垂れた。
（ひいい……千夏さんの！　すべすべの指が！　ぼ、ぼくのにさわって……！）
身体がカーッと火照り、新たな脂汗が噴き出す。
「うわ。ぬるぬるになっちゃってるね、先っぽ。これなら充分だわ」
スコートの裾をふわりと揺らし、千夏さんはゆっくりと腰を落としてきた。
「ね、このカチンカチンのおちんちんを、やわらかーい肉の中に挿れたらどんな気分になるか、興味あるよね？　知りたいよね？　それって自然なことだもんね」
「ち！　千夏さん！　ま！　まさか！　あの！　あの！　本当に？　いいのっ？」
まさか本当にこのままエッチしちゃうんだろうか？
ショーツを下ろしたのは甥を興奮させるための演出だろうと、修介は思っていた。
おま○ことか言わされそうになったのも、千夏さんの悪ノリだと思っていた。
さらなる快楽の予感といっても、指でシコシコ擦ってもらうとかを予想していた。

まさかいきなりしちゃうだなんて思っていなかった。
「あの！　だって！　千夏さん！　まさか！　こんな！」
首すじの血管が破裂しそうに熱い。耳もだ。喉はカラカラになっている。
こらこら、と叔母はささやいた。
「あんまり大声出すと、ご近所さんに聞かれちゃうかもしれないぞ？　窓から見られるかもしれないぞ？　まずいでしょう？」
リビングの窓は大きいが、庭があって生垣もあるからそう簡単には通行人からは見られないだろう。でも大声を出した時に誰かが通りかかったら不審に思われるはず。
「まずいけど、でも……だって……うう」
身体はわなわなと震えるばかり。よじったりも立ち上がったりもできそうにない。
「あたしも修介くんの男らしい身体見てるだけで、じんわり濡れちゃってるんだよ」
さらに腰が下ろされる。幹に添えた指で位置と角度を合わせながら。
スコートが邪魔で修介からは見えないし、それは叔母も同じだろう。
「この辺かなあ？」
くにゅり――あてがわれた。
「うう……っ」

緊張と興奮で身体中の毛穴が開き、新たな生汗がとろりと溢れ出る。もう身体中がどろどろに濡れている感じだった。

（昼間なのに！　リビングなのに！　相手はクラスメートとか彼女とかじゃなくて、千夏さんなのに！　じゅ、十歳も年上のオバさ……じゃなくて叔母さんなのに！）

「ねえ、修介くん、いいんだよね？　このまま、しちゃっても」

きみが甥っ子になった時から気になってたんだよね、と叔母は言う。

「後悔はさせないから。あたしだって、まだ子ども産んでないし、ぴちぴちしてるんだからね、アソコ」

くちゅちゅ……と先端が二十七歳の陰唇らしきところを割った。もう修介は胸の中に何かがいっぱいに詰まった感じで、ろくに口がきけない。

叔母は角度を調節しているのか、高校生の剛直に指を添えたままゆっくりと下腹を前後に動かす。亀頭が割れ目を擦る。まるで先走りのぬらぬらを塗りつけるように。

と――また少し叔母が腰を落とした。とたんに亀頭の先端が生肉のようなものにヌルッと当たった。ただの生肉ではなかった。熱を持った生肉だった。

まだ中には入っていないはずだ。

（おま○こって……こんなに熱いの？）

思ったとたんだった。今度は肉槍の先が何かを掻き分けるような感覚！　口をすぼめていた袋の口に亀頭の先をくぐらせて少しずつ広げていくような感覚！　ことばにできないくらいに気持ちいい……！

亀頭に密着している膣肉はなんだか重くて厚みを持っているようだ。奥に向かおうとするペニスを撥ねのけようとしているのでは、と思えるほどに。でも滲み出る愛液のぬめりが進入を助けてくれているようだった。

「んふっ、もう後戻りはできないよ、修介くん……さあ、これでもう大人だよ」

すらりとした長身の年上女性がさらに腰を下ろしてくる。正常位だったら修介は気後れして、挿入をやめてしまっていたかもしれない。

亀頭全体が呑みこまれた。奥の方へ進んでもやはり狭い。厚い粘膜層に四方からミチミチと圧力を加えられる。本能に突き動かされ、修介は下から腰を突き上げてみる。

圧迫してくる肉をえぐり返す快感が腰の芯に広がった。叔母が眉をひそめ、ちょっとだけつらそうに小さくうめく。

「うン……！」

熱い膣粘膜は相変わらず密着してくる。ちょっと下から腰を動かすだけでも亀頭粘膜に気持ちよく擦れて、今まで体験したことのない痺れが腰にまで広がる。動くなと

言われても無理だった。いや。そもそも叔母から動くなとは言われてない。
「そう……それでいいのよ、修介くん……わかってるじゃない」
「ち、千夏さん、気持ちいいよおッ」
「そんなにいいの？　お世辞じゃなくて？　本当かなあ……？」
額に汗の粒を浮かべながら叔母が尋ねてきた。
（お、お、お世辞なんか言える状態じゃないよおッ）
最初に亀頭の先で感じたあの熱さに今は肉棒全体が包まれている。それだけでも男に生まれたことを感謝したくなるくらいの愉悦があった。もちろん、修介の肉体が全身で歓喜に打ち震えているのはその熱さのせいだけではない。
ぬきゅ、ぬきゅ、ぬきゅ……叔母の粘膜輪の弾力。それは少年の想像や妄想を絶していた。秘肉は下から突き上げる修介の肉棒の動きにとまどいを示し、抗うように軋む。かと思うと次の瞬間には異物を迎え入れるかのごとく、豊かな弾力で締めてくる。
熱を持ったぬるぬるの竹輪に締めつけられてでもいるような気分だった。修介が腰を下から突き動かすたびに千夏さんは、あごを小さく揺り動かす。
「ん……んっ、は、入ってる、ね……ん、ん」
うめきにシンクロして豊かな膣圧を備えた膣肉輪は、むきゅ、むきゅ、と傘肉を刺

激してくる。修介もそうだが千夏さんもまた汗をびっしょりと掻いていた。
テニスウェアはさっきのミニゲームの時以上に内側から濡れて、大人の肢体の凹凸をはっきりと浮き出させていた。新鮮な果実を二つ詰めこんだみたいな胸のふくらみが腰の動きに合わせてふるるんふるるんと揺れる。
叔母のうめきに呼応するように修介もまたあまりの気持ちよさに、
「おっ……おお、こ、擦れて、うわ。わ！」
声を上げていた。もうこれ以上は無理だった。挿入した瞬間にこぼさなかっただけでも奇跡なくらいなのだ。未知の愉悦に襲いかかられている。
「ぼ、ぼくの、ちんちんが、あ、あ、熱い膜みたいなのに、包まれて、こ、擦れて。でも、でも、でも、千夏さん、まずくない？　どうして急にこんなこと……？」
きみに自信をつけて欲しいからよ、と叔母は答えた。
「もっともっと、下から、ゴリゴリ突いていいんだよ……」
叔母のことばが終わるか終わらないかのうちに、修介はまた本能に後押しされてそのことば通りに下から責めていた。じっとしていてもすぐに出してしまいそうなのだから動いたらもうどうしようもない。でも動かさずにはいられない。たちまち亀頭の雁が弾力のある牝粘膜をメリメリと引っ掻いた――。

「うふぅむ……修介くん……お、大きい……ッ」
「ち、千夏さああんっ、すごいよおお」
いったん突き上げた腰を下ろすと、元気な肉棒も少し引き下がる。しかし肉粘膜はそれを逃がすまいとして、なおいっそうの食いつきを示してくるのだった。入口の方に戻ろうとする亀頭傘の縁に追いすがるように粘膜が擦れてくる時の快感は、押し入る時と同じくらい気持ちよかった。
耐えられずにまた下から突くと、しっとりと熟した二十代後半の膣肉は修介の若竹を迎え入れてやわらかく締めつけながら、奥へ吸引するような動きを示す。
「うう……ふぅん……修介くんって、思ってた以上に……硬くて……男らしいのね、いつもこうなの？　んふっ……」
自信をつけさせようとしているのか、それとも本音が混ざっているのかは修介にはわからない。でも叔母の額には大粒の汗が流れている。演技では無理なはずだ。
「叔母さん、安心だわ……これだけたくましかったら、もう、充分、大人だわよ、修介くん……ふふっ……ふぅ、ふぅ」
ひと突きするごとに千夏さんは荒い息を吐く。修介も同じように呼吸は荒い。
（――え？）

いつの間にか二十七歳の手が男子高校生の手を握りしめていた。右も、左もだ。もう二度と離さないわよとつたえるかのように。
「くううう……千夏さん、か、かんべんしてよお……すごすぎるんだよお」
どれだけえぐってもえぐっても、厚みのある膣肉はそれを撥ね返して肉棒を温かくくるみこんでくる。奥まで挿れていっぱいに包みこまれた時には、抜く際に雁で感じる掻用感とはまた別の快感があった。熱い汁で満たされた壺に全身で浸かってでもいるような気分というか。
「……修介くん、どう、あたしの身体？　気持ちいい？　ねえ、修介くん……？」
尋ねる叔母の声もどこか上ずっている。
「う、うん、うん、うん！　千夏……さん、ぼく、ぼく、こんなにいいなんてっ」
身体を繋げながらその相手に名前を呼ばれることがこんなに気持ちいいだなんて、知らなかった。肉体的な気持ちよさだけではなく、こころの気持ちよさ。
「ほんとに？　ふふ、よかった」
甥っ子の答えを聞くと千夏さんはまたぎゅっと強く手を握ってきた。今度はそれに合わせて膣口あたりの粘膜までもがぎゅう！　と締めつけてきた！
「うわ。わ。千夏さん、な、何をするんで、すか」

自然に滲み出ていたらしい蜜液が締めつけによってぷちゅ！　と音を上げて結合部から洩れた。修介の陰毛のあたりまでべとべとになってしまう。

「ああ、修介くん……なかなか、いいわ……初めてだとは、思えないくらい……」

テニスウェアをまとったままの叔母は自分から腰を動かし始めた。左右にくねくねとウエストをくねらせたかと思うと、次にはしゃくり上げるみたいに上下に揺らす。膣肉に亀頭がやわらかく擦り回される。

「ぼ……ぼく、困る……こんなこと経験しちゃったら……これから、困る」

放課後にテニスコートの横を通りかかって女子テニス部員を見ただけで、あるいはテレビのテニス中継を見ただけで、今日のことを思い出して勃起してしまうだろう。

「ああん……あはん……でも、気持ちいいんでしょう……どうしよ……あたしも、気持ちいいわ……どうしてかな。修介くんだからかも……相手がきみだから、こんなにいいのかな……あたし、腰が止まんなくなってきた……」

うっとりとそんなことを言いながら、はあはあと息を吐きつつ叔母は腰を遣う。

ぬぷっ、ぬぷっ——じゅぷッ、じゅぷッ——。

白いテニスシャツは二十七歳の肢体の起伏を隠してはいないどころか、脱いだショーツと揃いのデザインらしい淡青色のブラの輪郭まで透かせている。スコートは自然

にふんわりとめくれて肉感的な太ももが露わ。
修介の鼻は叔母の発する二十代後半の甘ったるい汗の匂いも吸いこんでいた。匂いに後押しされるように陰嚢から精液がかたまりのようになって幹を這い上がってくる。
「ち、千夏さん、ぼく、もう、無理……出しちゃうから、離れて、降りてっ」
「どうして？　いいのよ。このままちょうだい……修介くんをちょうだい！」
「だ、だ、だめだよおお。千夏さんやめて。たまらないから、ああっやめて」
妊娠しちゃったらどうするんだよう、と言おうとしたけれど、もう声にもならなかった。気持ちよすぎて！
若々しい張りと歳相応の熟し加減を兼ね備えた悩ましい肢体の持ち主は、いっそう強く修介の手を握りしめ、くねくねと腰をうねらせる。
それ以上修介には抵抗のしようもなかった。吸いこむような膣肉の動きに身を任せ、再度腰を突き上げていた。すると――。
「う。うわ。ち、千夏さん、の、中が」
それまでのように膣口付近の肉輪にペニスの胴体がキリキリと締めつけられるだけではなかった。叔母の腰のくねりに合わせて奥の方が亀頭傘の縁の裏側のくぼみに沿うようにしなしなとからみつき、そのまま締めつけてくる。それも、

「んっ……いい……修介くんの、太いの、が……いい……んっ」
という叔母のうめきの「んっ」の時に合わせて。
「ううっ……ううっ……千夏さん、ぼく、出したい……だから離れてよおっ」
「いいって言ってるでしょ……んっ……んっ……出していいんだから。その、ぼく出したいって、いいわねそれ。耳に気持ちいいから、もっと言って。ほら言いなさい」
「千夏さあん……ぼく、出したい……ぼく千夏さんで射精したあい……ッ！」
「ああいいわ。それ、女にとって最高のことばかも……かわいい男の子に言わせたいせりふ第一位かも……本気で熱く疼いてきちゃったあ。ふふ……ん、んんっ」
修介はさっきからずっとそうだが、叔母もまた鼻だけでは息ができなくなっているらしい。開きっ放しになった口から甘いことばとともにかぐわしい息が吐き出される。
「……しゅ、修介くんの童貞喪失の相手ってだけじゃなくて、修介くんの初めての膣内射精の相手もあたしにさせてよ……ね、修介くん、だから出して。いいんだよ」
「そ、そんな……千夏さん……ぼく、もう、そんなこと、言われたら。出ちゃう」
なんとかして結合を解けないものかと腰をひねってみた——ひねろうとしてみた。
無駄だった。ぴったりと食いついた叔母の性器は男子高校生の肉棒を奥まで吸いこんだままヒクヒクと締めつけ、離そうとはしない。それどころかそうやってひねろう

とする動きが膣肉への摩擦となり、まるでむせび泣いている女性の背中の震えのような、ぶる、ぶるっ、といういっそう強い肉輪の締めつけとなって返ってくる。
「も、もうだめだあ……ッ」
腰のあたりが花火でも爆発したかのようにカッ！　と熱くなった。灼熱のかたまりが細い通路を進み、快感を伴って先端を割った。瞳の奥の方でも火花が散る。どくっ、どくっ、とはっきり音を立て、修介は叔母の中に埋めこんだまま爆ぜさせていた——。
「ああ……すごい……修介くんの……重いのが……打ってくるみたい……ッ」
男子高校生の腰と肉棒の律動に合わせるように、年上キャリアウーマンの膣肉輪もまた精液を浴びながら、なおいっそうきりきりと蠕動した。修介には未体験の悦楽だった。オナニーの時にティッシュにただ出すのとはまるで違っていた。
狭い膣奥の肉に包まれたまま、脈を打つように亀頭がふくらんだり、戻ったりを繰り返す。どくんっ……どくどくんっ。牝肉輪はその脈打ちを受け止めてしなしなと締めつけを返しながら、やわらかく包みこんでくれている。甥っ子の精子を歓迎するかのように。一滴たりとも外へはこぼすまいとしているかのように。
「修介くんの、すごい……まだ、ぴくぴくって……いっぱいになっちゃいそう」
「千夏さん……すごいよお……ああ、ぼく、まだ——うっ！　ううっ！」

波が繰り返し打ち寄せるみたいに、射精の発作は二回、三回と繰り返された。こみ上がってくるどろどろした大量の精液を、修介はどっくどっくと叔母の膣内に吐き出しつづけた。

びゅどッ！　びゅどどどど……！　激しい射精に合わせて自分の放つ粘液が狭い肉壁を打つ音が確かに聞こえた。思うさま放っているという快感に、それを受け止めてもらっているという悦びが加わって、若い牡の腰が打ち震える。強いこわばりがやがて弛緩に変わり、放出の快感がゆっくりと濃い余韻へと移っていく。

「はあ……ふはあ……」

修介が息を吐くと、

「……ふうー、ふうー」

叔母はテニスの時にも掻かなかったような大量の汗で額を濡らしたまま、ゆっくりと腰を上げた。

ぬるり……まだほとんど硬直したままの肉棒が、温かいぬめりの中から粘っこそうな愛液をからみつかせたまま姿を現した。

「千夏さん、ぼく、ぼく……」

「うふふっ。よかったわよ、修介くん」

スリムな年上女性は甥をほめたたえるかのようににっこりと笑う。ずっと手を握り合っていたせいでじっとりと濡れた指先を十七歳男子の額に這わせ、乱れていた短い前髪を撫でつけてくれる。修介の瞳をじっと覗きこみながら。

「ねえ、修介くん。姉さんは、どうして再婚しないんだと思う？」

「え……どうしてって」

考えたことはなかった。義母と二人の生活が当たり前だと思っているから。

ところが、修介がびっくりするようなことを叔母は口にする。

「知らなかった？　和香姉さん、再婚の話、何回か断ってるんだよ。一回は埼玉の伯父さんから。それから出版社の副社長さんからも話が来たことがあるらしいわよ」

「あ……そ、そうなんだ」

知らなかった。なんとなく胸の中がざわつく。ずっといっしょに暮らすつもりでいた義母が別のところに行ってしまう光景を思い描いてしまった。

「でも……でも、断ったんだよね？」

「そうよ。なぜだと思う？」

考えてみる。でも、わからない。

叔母は焦れったそうに、きみがいるからじゃない、と言った。

「姉さん、きみのことを待ってるのよ」
「えっ……？　待ってるって、ぼくのこと……まさか！」
「このあたしの女の勘に間違いはないわ」
ティッシュで肉棒を拭いてくれた叔母は、次に自分の身体を拭い始めた。
「ねえ修介くん。姉さんって、押しに弱い性格でしょ。今までは俊吾さんに義理立てして断ってこられたけど、いつまでも断りきれるとは限らない。そうしたら、姉さんは再婚してしまうかもしれない」
それでもいいの？　と引き締まった肢体の持ち主は問い詰めるように言う。
「姉さんが、きみ以外の誰かのものになってもいいのかな？」
「え……それは」
テニスの時に腕で抱いた義母の身体の感触を思い出していた。弾力を、吐息を、思い出していた。萎(しお)れかけていた肉棒はそれだけでまたミチミチと硬くなってきた。
（よくないよ……いいわけないじゃないか）
ウィンドブレーカーに身を包んだ義母を見て今日初めて男としての欲望を覚えた、というわけではないのだ。
いつからかはっきりとは自分でもわからないがもう何年も前から、修介は義母を女

性として見つめつづけてきた。
（ぼくは、お義母さんが誰か他の奴のものになるだなんて、絶対認めない！）
「あはっ。どうしたの、急に思いつめたような顔しちゃって」
指でそっと甥っ子の頬を撫でる千夏さん。
「あのね。姉さんだって、きみのこと、もうただの息子だとは思ってなんいじゃないかな。さっき言ったみたいに、きみが行動を起こすのをずっと待ってるかも。ね、修介くん。どこかのおっさんに取られる前に、修介くんがものにしちゃいなさいよ」
一時間前の修介なら、そんな大それたことそう簡単にできるわけがないよ、と考え、叔母の提案など突っ撥ねていただろう。
だがこの時の修介は、叔母を相手に童貞喪失するという大それたことをすでに一つ経験してしまっていた。だから。
（お義母さんを……ものにする……）
そのことばは呪文のように修介の中でぐるぐると回り始めていた。
「あたし、シャワー浴びてくるね。本格的に汗掻いちゃったから」
千夏さんはゆっくりと立ち上がってバスルームに消えた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

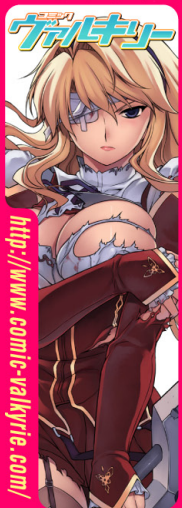
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!